

## 史料室だより

恵泉女学園史料室 〒156-0055 東京都世田谷区船橋5-8-1 TEL・FAX (03)3303-6920 (直通) 題字デザイン 高岸 昇

## 1929年という年

かねてから学校設立の夢を抱いていた河井道子先生は、1926年春欧米の学校視察に旅立ち、「わたしが出会った人々や、参観したところを考え合わせて、わたしは自分の学校を始めることは奉仕の正道に叶っているのだということをますます確く信じた」(『わたしのランタン』)。だが'27年4月に帰国して先生が目にしたのは、金融不安に大揺れの日本経済であった。3月以来いくつもの銀行が休業、秋には銀行の合併が相次いだ。不況は長引き就職口は減り、'29年3月東大生の就職率は約30%という有様であった。一方、文部省は青少年の思想「善導」政策を進めており、'29年9月には国体観念明徴・国民精神作興のため、教化動員を実施、その旨を各学校に訓令する。70年後の現在の日本とよく似ていないだろうか。有名な世界大恐慌に先き立って、日本社会は激しく揺れ続けていたのである。大局を見通していたに違いない新渡戸稲造が、河井先生の学校設立の考えに慎重だったのには訳があったのだといえる。のちに彼女の後援者となった人々も、始めはためらった。「なにしろ創設者となるはずの者が持っている唯一の資産は開拓精神だけだった」(同書)からである。

そんな中での学園創立である。1929年4月8日の開学

式のことを、先生は次のように記している。「涙が目に一杯あふれた。わたしの夢が実現するのをまのあたりにしてわたしの感情はたいそうたかまっていた」(同書)。開学したとはいえ財政面やハード(校地・校舎)面では課題が山積していたし、公認された筈の教育方針やカリキュラムも全く安泰という訳ではなかったようである。恐らく上述の文部省の動向とも無縁でないであろうが、創立5年後、財団法人化と文部大臣の指定認可を申請した際、先生の意を体して交渉に当たった土居誉雄は、「係官には正科として礼拝を守り、聖書を教えるということもそうであったが、それよりも〈国際教育〉と〈園芸〉を正科とするということが納得しがたく、その説明にはずいぶん苦労した」と手記を残している。

創立された学校は卒業生を出して最初の完成を迎える。下の写真は手製のワンピースに身を包んだ第一回卒業生たちであるが、河井先生の特愛された讚美歌302番を想起させる雰囲気がある。「み神の風をば帆にはらみて、今日しもわが舟いでゆくなり。さからう風にもおおなみも、みたすけ仰ぎていとやすけく」(1節)。9名で出発した学園は、今年3キャンパスで3082名が学ぶ。逆風も大波もあった70年間、その中でそそがれた「こよなきめぐみを」(3節)忘れてはならないであろう。(大山 綱夫)



1934年 第1回卒業生

## 恵泉か榮泉か

史料室が所蔵する学園設立当時の書簡や電報のファイルの中に、漢字の音韻や漢書の引用に基づいて「恵泉」と「榮泉」を学園名の候補として推薦する便箋一枚のメモがある。署名はないが、「御校の御名のことばかり考へ候」と書かれているので、筆者は学園名選考に関与した学外の人物と推定される。このメモには、筆者が東伏見宮家で見た花瓶の銘からヒントを得て「葆光」という名称を思いついたことも書かれている。この筆者は誰か、このメモから学園名選考について何がわかるのか、調べてみよう。



学園の名称に関するメモか

学園名決定について河井先生は『けいせんぶんげい』第一号に“「恵泉」の謂れ”という一文を寄せた。この冒頭部分を要約すると、“河井先生は学園の名称を「光、生命、泉」の中より得たいと思い、これらを含むいろいろな熟字を考え、辻村靖子先生の意見を求めた。この先生は女子英

学塾で和漢の学を教え、また現在某宮家に進講している学者である。この先生が「恵泉は語呂も意味もよい」として選んだので、これを学園名とした”となる。この内容を前述のメモと照らし合わせると、漢学の素養があり宮家に入出入りするメモの筆者は辻村靖子先生と推定される。そうだとすれば、このメモは河井先生の諮問に対する回答の覚え書きだろう。

このメモから何がわかるだろうか。第一に辻村先生は音韻を基準に名称を選択したことがわかる。辻村先生は名称選考には漢詩と同様に平仄（ひょうそく）への配慮が必要だと言う。平とは中国の発音法の一つで発音の高さが前後ほぼ等しいもの、仄とはそれ以外の発音法である。「特許局」のような仄の繰り返しは耳に快く響かないので避けるべきだ。この原則に従って辻村先生は仄の「学園」の前に掲げる名称として、平の「恵泉」と「榮泉」を選んだ。

第二に、辻村先生は「恵泉」一つを推薦せず、「榮泉」と併せて二つの候補を示したことがわかる。そうであれば最終的に「恵泉」に決定したのは河井先生ではないだろうか。河井先生は上記の文で「恵」とは「代価を払はずにただで頂戴した有難い御恩寵のこと」と説明している。この「恵」に河井先生の特別の思いが込められたのだろう。

第三に「恵泉学園、ソコテ耳にキキイノデス」とメモに書かれていることから、辻村先生が「女学園」でなく「学園」を前提として名称を選考したことがわかる。「女学園」を前提として名称選考の依頼を受けたとすれば、平仄に留意する辻村先生のことだから、「女」と「学」という仄の繰り返しに批判的コメントを加えた筈だ。どうして「学園」が「女学園」に変わったのだろうか。

(梅澤 ふみ子)

## 「新潟疎開」について



1945年8月 佐藤家の庭で

5月17日普通部14回生13名をお迎えし「新潟疎開」について伺う座談会が開かれた。その要旨は「恵泉」429号（1999.7）「史料室から」の欄にすでに紹介し、詳細は記録として保存させていただいた。ここでは会の後手紙などで追加して寄せられた話や、史料室に残されている記録なども参考に、時代背景その他関連する事柄をも含めて報告したい。

1945年7月、当時の普通部3年生のうち「国勢興業の学校工場」で雲母はがしをしていた生徒達と、「金石舎」で働いていた生徒の一部、あわせて31名が、“学校工場の疎開”ということで新潟県三島郡島田村字村田に疎開をした。村での生活は、治暦寺というお寺の本堂に起居しながら、近くのクリスチャンである「佐藤さん」宅に通い、礼拝を守った後、作業場に当てられている二階で、学園におけると同じように“雲母はがし”に従事するというものであった。

前年1944年8月戦況厳しい中で学徒勤労令が公布された。当時の恵泉普通部3年生は「アルマイト工業㈱」へ、4年生は「白洋舎」へ、5年生は「東洋化学工業所」へ動員され、12月になると2年生(後に新潟疎開をする学年)にも、「金石舎」へ出勤するか、「国勢興業の学校工場」で雲母はがしに従事するように、との通達があった。翌年3月空襲が激しさを増す中、東京都教育局長より“工場疎開の急速な実施とそれに伴う勤労学徒の移動を勧める”通達が出される。手許の会議録や日誌などを見ると恵泉も4月には都庁へ問い合わせるなど生徒達の安全をどう守っていくのか方途を探りはじめている。その一つとして高野タカ先生の故郷である新潟が候補地に上げられ、検討の結果疎開先に定められた。「佐藤さん」は高野先生と同信の友、また先生の兄上が檀家総代であり、その依頼を治暦寺が受けとめられたということらしい。

こうしてスタートした村での生活は厳しいものであった。食糧が手に入らないのである。東京から持ちよった僅かな缶詰などを分け合い、野草を採り、タニシを佃煮にし、海

水を汲んで味付けをする日々であったという。買い出しに行っても売って貰えない。面会に来られたお父さんのお一人の指導でお寺の裏山を開墾しお芋の蔓を植えながらも、子供心に先行きが不安でたまらなかった。「受け入れ態勢ができていない内にきてしまった」とのちに治暦寺の住職さんが語っているように、「工場疎開」の受け入れに関しては地元と都庁との間に行き違いがあり、手続きに手間取ったらしい。先生方が頻りに都庁との間を往復し、工場関係者が新潟に向くなど慌ただしい動きが見られる。恐らくこの間は配給も受けられなかったと推察される。『「東京都教育史」通史編4』の「学校工場の推進と工場の疎開」の項には恵泉の「新潟疎開」とともに、都立第一高女、都立忍ヶ丘高女の長野、群馬への疎開が具体例として取り上げられているが、「作業の主たるものは食糧確保であった」との記述がみえる。

お寺では骨壺がずらりと並んだ本堂に蚊帳を吊ってやすんだ。お化けの話で震え上がったこともある。大奥様から掃除や雑巾掛けの仕方を教えて頂いたり、お風呂に入れて頂いたり宗教の違いを超えて親切にして頂いた。山を越えて医者に行ったこと、寝ずの看病をしてもらって新たな友情を深めた話もある。親に手紙を書く度に「迎えにきてほしい」と訴えた人もあり、「皆が大変な時なのだから」と自分を納得させていた人もあった。

お寺で聞いた終戦のラジオ放送は雑音で何も分からず、夕方駅で汽車から降りてくる人に号外をもらって日本が戦争に負けたことを知り涙した。悔しかったのか、情けなかったのか、これで東京に帰れるという安堵の涙か複雑なものがあった。8月31日夜帰京、家族との久しぶりの無事な再会を喜び合ったが、虫刺されが化膿してやっとの思いで帰りついた人、帰るとすぐ大病で長い入院を余儀なくされた人もあった。

帰京の翌日喜んで登校した生徒達は放課後教室に残され、「疎開中の態度について反省文を書くように」と言われ、思い当たる小さな幾つかはあるものの予期せぬお言葉にびっくりし、割り切れぬ思いを抱くことにもなった。

3年前に有志8人がお寺を再訪した。お礼の気持ちとあの頃を整理しておきたいという思いからである。疎開当時は赤ちゃんでお寺を継いでおられるご住職とお話ができた。佐藤さん宅を訪れた方もある。「河井先生から丁寧なお礼状が届いてどこかにしまってあるはず」とのことであった。今夏、同窓会の旅の途次、恵泉の歴史にゆかりある地として治暦寺と佐藤さん宅にお寄りし温かく迎えて頂いた。「恵泉の人たちは2、3人づつ固まってよく泣いていた」というご住職のお兄さんのお話、「一緒に遊んだ思い出がある」と佐藤さんの息子さんのお話もあったとか。

座談会での、司会者と川田学園長の言葉「戦時中の学園を語る一つの大切な出来事として歴史に記憶されるべきである」「皆さんは恵泉の辛く苦しい時の証人であり、それらを乗り越えて今日がある」を心に深く刻んでおきたい。

勤労働員に関しては、『「想起」—勤労働員下の白洋舎時代—』（1992刊）がすでにまとめられており、現在「金石舎」についてまとめる努力が進められている。「東洋化学工業所」、「アルマイト工業㈱」の資料も少しずつ寄せられている。折しも新聞で“学徒勤労働員の歴史を明かす2書”が紹介されているのを見つけ、“時”を思わせられている。（西島 黎）

## 卒業生座談会抄録



第9回 卒業生を囲む会 1999年7月3日（土）

1992年以来続けられている史料室主催の座談会も、時代が移り、高校6回から10回生の番となった。恵泉の歴史にとっては、河井先生を天に送り、清水先生を園長に迎えた大きな変化の時である。司会は参加者と同じ学年の大崎先生にお願いした。

川田—私はみなさまと同じ年代である戦争を経験いたしました。今日は、それぞれの方から恵泉で学ばれた一番大事なものが、それが今まで生きてこられた中でどう役立ったか、また今ここに学ぶ子供たちにぜひ考えてもらいたい、守ってほしいことなどお聞かせください。

司会（大崎）—今日来られた高校6回生は、1948（昭和23）年入学、10回生が卒業されたのが1958（昭和33）年、戦後の混乱期から高度成長前の大変な10年間でした。恵泉で私たちは、河井先生の精神を受けとめ学校を大きくし飛躍させる力を持たれた清水先生の影響のもとで育ちました。

山崎和子（6回）—私の場合、母が強く望んで、父の反対を押し切って入学させてくれました。私が中2の夏休み、母は御殿場での河井先生の聖研に参加しました。留守中小1の妹が疫痢にかかり、母は嵐の中を急ぎ帰りましたが亡くなりました。その時河井先生が来て下さり、姉と私を両脇にかかえて「お母さんをなぐさめて、はげましてね」と言って下さいました。結婚後夫と共に受洗。夫の仕事で海外で暮し、恵泉の国際教育を生かすことが出来ました。

相良淳子（7回）—清水先生は、自分は河井先生のお手本を間違えないようになぞっていくと繰り返し言われました。あの時の方向づけは大切だったと思います。敗戦までもない頃河井先生が、外国のお客様に、対等に友好的に堂々と接しておられるのを見て誇りに思いました。この10年間国際事業協力団で日本語を教えています。私の仕事の根底には、真の国際人河井先生の教えが流れています。

高島敦子（7回）—父が教育熱心で、民主主義を教えることの出来る学校と知人に聞き、恵泉に入学。はじめてキリスト教教育にふれ、暗誦聖句によって精神的に豊かなものを与えられました。虐げられている人々の側に立ったイエスのファンで今も教会に通っています。青山短大でずっと英語を教えています。これからの恵泉の生徒には、私が河井先生から受けとめた、自立、世界に目を向ける、自分らしいおしゃれを望みます。先生方には情緒面を伸す教育を。



いい学校を出てよかったわね」と言われます。私は園芸が好きで入学しました。卒業後聖書神学校で学

び、牧師の妻として幼稚園をやりながら教会に仕えて来ました。河井先生から学んだ花を育てることは、人間を育てることに大きな力を持っている、今の教育にはそれが欠けていると感じます。

岡山洋子（8回）—母がYWCAに行っていたので、私を河井先生の学校に入れました。あの6年間に覚えた聖句と讃美歌は今も身近なものになっています。その後恵泉は偏差値の高い学校というイメージになりました。河井先生が目指されたのは、勉強が出来るというより全人格的な女性を社会に送り出すことにあったと思います。昔からの恵泉の良い教育を今につなげてほしいと願っております。

杉本俊子（9回）—日光で育ちましたが、両親がクリスチャンで恵泉にきました。寮生活をして、上級生のお姉様たちとの縦の関係がうれしかったです。河井先生は時々寮に食事に来られ、私を見て「あそこにいるちびちゃんは誰だい?」と聞かれたのを覚えています。寮には先生の始められた、ハロウィンやクリスマスのピーナッツなどの楽しい行事がありました。日曜日には連れだって教会に行きました。

水田桂子（9回）—中1桜組の担任は、園芸科を卒業されたばかりの石山（後の川口）先生で、楽しく仲の良いクラスでした。先生の影響で園芸が大好きになりました。進路について若い心はゆれ動きましたが東京女子大学に進み、その後結婚しました。4人の子供をかかえ突然主人を失って、恵泉の同級生からたくさんのはげましを貰いました。何をなすべきか真剣に考え、友のすすめで日本語の教師となり現在まで続けております。恵泉在学中から美竹教会の会員です。

池垣協子（10回）—私は編入生で創立者に直接お会い出来なかったのは致命的に残念なことです。前は札幌のきびしいカトリックの中学で、「あなたたちは、胸に手を当てて

考えると、親にも言えない悪い罪を犯したことがあるでしょう」との言葉が子供心につきさりました。恵泉に来て「神は愛です」と教えられて、生涯を通じてうれしいことでした。自分の60年の人生はいい人生だったと思い、恵泉とのかかわりをふり返っています。夫の仕事で外国に暮し、子供を育て沢山の経験と取り組みました。今は社会奉仕を考えています。

宮崎恭子（10回）—私は経堂で生まれ育ちました。入学前、通りで河井先生をお見かけしたこともあります。6年間本当に楽しくすごしました。講演会や音楽会などすばらしい日常でした。卒業後、結婚前に受洗しました。恵泉高校で常勤、非常勤として英語を教えて来ました。私たちの在学当時学んだ思いやりの心が培われるよう一貫教育に期待します。

川田—今春みんなの協力と努力で中高一貫教育が出発しました。みなさんが恵泉で学ばれた時の楽しさと感動が後の人生に生きた力となって働いていること、教育というものの力を感じました。現在の恵泉でも、一生かかってものをいうような教育を大事にしたいとがんばっております。

（吉川 俊子）

## 河井先生をめぐる人々(5) 森久保 寿

### 小さき弟子の群(2)

河井先生が森久保寿夫人を人に紹介する時の得意な言葉は「私の家主の森久保さん」で、河井先生は1918年頃から1931年まで、森久保邸の西洋館を居としてYWCAの活動を、また恵泉創設の準備を進められたが、森久保家が狛江の新居へ転居後は母屋と離れ（現在の日本間）まで提供を受け、1929年ついに西洋館を校舎として恵泉を開校することが出来た。

森久保夫人は、女学校から津田梅進みここで河井道「小さき弟子の群」の夫君と4人の幼として家庭を守り



上代淑先生の山陽子先生の英学塾に子先生に出会いに加わる。実業家い子女を持つ主婦つつ自宅を維持会の磯部夫人を助けて

会員のレプタを集め、また繁く恵泉へ行って「恵泉の集い」やバザーなどで寄付金を作る準備をし常に維持会の隅の首石の役割を果たした。「母は先生方のお陰で何時も何事にも感謝の人だった」と長女の素さん（高2回）は語るが、真実・温厚・寡黙の「維持会のおばさま」だった。

1969年折りしも恵泉創立40周年4月、森久保寿の恵泉創立以来37年間にわたる理事（監事）に対し叙勲の沙汰があり、同姉は固く辞したが、家庭人の奉仕が公に認められたことを学園としても喜びたいと受諾を説得し、維持会の人々の代りにと勲五等瑞宝章を受けた。（佐藤 恵子）

## ベイリー従軍牧師のこと

河井先生の『スライディング・ドア』を読み返すと、敗戦直後恵泉を訪れ様々な形で援助の手を差しのべられた人たちのことが記録されている。その中に、冬季室内にも寒風吹きすさぶと言われた小平の農専の学生たちの身を案じて、山奥にジープでわけ入り、25俵の炭を求めて、帰途午前3時に寮の戸を叩いた進駐軍付牧師A・パーネル・ベイリー先生のことが書かれている。河井先生は心からの感謝をこめて、その贈物が学生たちの「冷えた体をなぐさめ、ふるえる魂に愛のぬくもりを与えた」…「私の学校が存続する限りこのキリストにある愛のわざは記憶にとどめられるであろう」と記されている。

現在創立70周年記念文集のひとつとして証言集『河井道一人・信仰・教育』（仮題）が企画されている。編集者の一人として、何とかあのベイリー牧師を見つけ出して、ご健在ならば執筆をお願いしたいと考えた。恵泉の大学で教えられた鈴木有郷先生がベイリー師と親交があられたことを思い起こした。先生によると師は81歳で、きわめてお元気、説教もされているとのこと。喜び勇んでお願いの手紙を書くのと折り返し原稿が送られてきた。戦後の河井先生との出会い、何度かの恵泉訪問、51年河井先生最後の渡米の折、ベイリー師宅に滞在された時のことなどが、心あたたまるタッチで描かれていた。

筆者は恵泉卒業後、東京女子大の学生時代、毎日曜日の午後、所属する松沢教会で、ベイリー師の青年のための説教を聞いた。敗戦の混乱と虚無の中に沈みがちな若者に希望の所在を訴える力強いメッセージが記憶に刻まれている。



戦後まもなく恵泉を訪問された折のベイリー師 右から2人目



1934.6.2 園遊会（創立5周年）

当時20代後半のこの若い牧師は、幾人かの青年を信仰に導き、教会近くの施設に住む戦災孤児のもとに食物と友情を運び、敬愛する河井先生の学校のため奔走された。そしてこの度の恵泉との「再会」をよろこび、FAXを通じ、あるいは電話のむこうから、「私が今恵泉のためにできることを是非教えてほしい」と呼びかけ続けて下さるのである。

（吉川 俊子）

## 賀川豊彦記念松沢資料館

松沢資料館に足を運ぶようになって一年が経とうとしている。賀川豊彦と河井先生は、1941（昭和16）年太平洋戦争直前の3月に日本基督教連盟から平和使節として米国へ派遣された際の同行者であった。学園に外相が訪ねて米国との平和工作を依頼した等という話もあり、使節団の目的を確認し直す必要もあろう。資料館のアーキビストである米沢和一郎氏によって、賀川と外相との接点は明らかになったが、河井先生との関係を裏付ける資料は未だ見つからない。しかし、賀川と先生には国外での活動を始め、多くの接点があり、学外での先生の活動を知る多くの資料が残されている事を指摘された。今後も、調査を続けていきたい。

（徳江 さやか）

### 恵泉あれこれ (5)

#### メイポールダンス

園芸生活学科の創設を祝うプレイデーは、毎年5月最終土曜日に行われている。メイポールダンスは当日の参加者の大きな楽しみになっている。

花で飾ったボールの周りを、ジーンズと白いシャツに麦わら帽子をかぶった男の子役の学生と、チェックのスカートに白いブラウスの女の子役の学生たちが輪になって、ボールに下げられた色とりどりのリボンを手を、音楽に合わせて軽快に踊りながら、リボンをボールの周りに美しく編んでゆく。山口美智子先生が、アメリカの園芸学校で学ばれたものを、1950年頃から恵泉の園芸科らしく取り入れて下さって今日にいたっている。

1934年恵泉創立5周年記念の園遊会（後の恵泉デー）でもメイポールダンスを踊っている写真がある。その時はおそろいの体操服（白いシャツと黒いブルマー）を着てリボンは紅白だったとのことである。

メイポールダンスの歴史は非常に古く、ヨーロッパで春の到来を祝う行事として始まり、その後一旦途絶えたようだが、特に英国で若者達の楽しい行事として今日まで受けつがれてきていると聞いている。

（宇佐 節子）

## 横浜訓盲院訪問

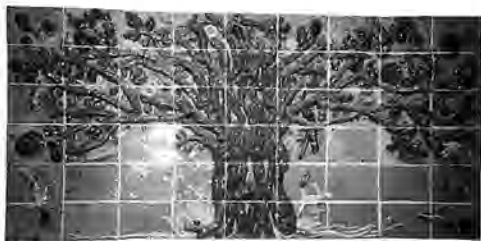


左より、佐久間芳子さん、今村貞子学院長、  
今村鎮夫副施設長

「史料室だより」3号で紹介した「芳子ちゃん」-佐久間芳子さんと学園が少しずつ交流を再開

できたことは、昨年度の最も嬉しい仕事のひとつである。その芳子さんの学んだ横浜訓盲院を、芳子さんと「点訳の会 恵泉」の方達と共に9月2日訪問させていただいた。山手駅から点字ブロックに沿って、急な上り下りの道を30分近く歩いて到着した。芳子さんにとって卒業後46年ぶりのお里帰りである。副施設長を務める今村鎮夫先生、芳子さんを可愛がってくださったという今村貞子学院長が、そんな芳子さんと私たちを暖かく迎えて下さった。

改築された横浜訓盲学院・普通部の玄関には、子供たちが2年がかりで制作したというタイルの壁画「実のなる木」があり、見る者の心をうった。理療科は中途失明や弱視の方々も訓練する学校で、目立つ色で細かな



「実のなる木」

配慮がなされていた。授業を終えて帰っていく生徒たちの表情がとても明るく、訓盲院の校風を感じた。芳子さんたちが通っていたお風呂屋さんがあった場所、訓盲院の創始者、シャーロット・ピンクニー・ドレーパーの家があったあたりなども案内して下さった。ここで流しの按摩の笛を聞いて、ドレーパーが日本の視覚障害者に教育を思い立たれたと思うと感無量だった。最後に子供たちの生活する寮を見せていただいた。きちんと整理整頓された部屋の様子から、生活訓練に重点をおく訓盲院の教育方針はそのままであることが伝わってきた。昨年、今村鎮夫先生の来校時にお話は伺っていたが、親がシンナーを吸ったために障害をもって生まれた子、虐待によって視力を失った子、体の障害の上に知的障害を加え持った子を目の当たりにして、強い衝撃を受けた。

この仕事のむずかしさを体感すると共に、その中にもあっても明るくおらかな職員の方々の姿に多くを学んだ。芳子さんとの再会を通し、恵泉と横浜訓盲院との交流再開を願わずにはいられなかった。(安藤 和子)

## 史料室から

1997年度(7月から)10人、1998年度31人、1999年度10月22日現在42人(今年度半期で既に昨年度総数を上回っている)、総利用者数83人と毎年確実に増え続け、史料室の存在が知られてきたことに喜びを感じている。今年度に入り、中・高の生徒がクラスに花の名前がついた由来や恵泉デーの始まりなど調べに来てくれることで、私達も思わぬ発見から大変勉強になっている。また、時代を反映してインターネットの検索によって、宮城学院からメイポールダンスについての問い合わせもあった。海外在住の卒業生も留学生科に関心を持って帰国のたびに足を運んでおられる。研究論文などのため来室なさる方も増えた。6月には加藤武子さん(新渡戸稲造先生の孫)が学園長を訪問された後、新渡戸先生の資料をお一人で整理なさっているのので、参考までに、と立ち寄られている。(安藤 和子)

98年度から続けてきた史料室規程の改定は一段落を迎えた。来年度から、新たな史料室規程のもとで業務がなされることとなる。70周年記念事業に委員の手がとられていることから資料分類、整理は滞りがちだが、分類方法の改正も進められている。多様な利用者に対応していけるものとしていきたい。

今年の8月15日、NHKスペシャル「敗戦ニッポン新しい日本人をめざして～戦後教育の原点は～」では、戦後教育の原点となる教育基本法の作成過程が紹介された。7名の委員のうち唯一の女性である河井道子の発言も紹介された。既に史料室だよりの4号で関係する多くの印刷物が史料室にあることを紹介したが、近年岩波書店から出版された『教育刷新委員会・教育刷新審議会 会議録』では、席上で女子教育について熱心に語る河井先生の言葉を知る事も出来る。(徳江 さやか)

## 恵泉女学園創立70周年記念文集の刊行

史料室が協力準備を進めてきた河井道著『「恵泉」巻頭言集』が本日発行される。再校段階では元高校教諭木山靖子先生にご協力をいただいた。第2巻の『証言集「河井道一人・信仰・教育」』(仮題)は来年3月、第3巻の座談会記録はその後の刊行を予定している。

## あ と が き

「史料室だより」第5号をお届けします。学園は70周年を迎え一同活発な活動しております。皆様からの資料、ご来室をお待ちしております。

委員長：川田 殖

委員：大山綱夫、梅澤ふみ子、大崎好子、  
佐藤恵子、宇佐節子、吉川俊子、西島 黎

室員：安藤和子、徳江さやか